別添4

校務DXを促進するための取組に関する参考資料

令和8年4月

文部科学省 初等中等教育局教育職員政策課 働き方改革推進室

本参考資料の活用方法について

- 本参考資料は、「取組事例編」と「学校編」から構成されており、掲載されている取組は、令和6年度の自己点検において、校務DXの進捗に課題があったものの、令和7年度にかけて大きく取組が進んだ学校にヒアリングを実施し、それらの学校において、特に進捗した取組を取り上げています。

- こうした取組は、「学校内で検討する時間がない」、「何から着手したらいいのかわからない」ことなどを背景に校務DXへ取組み難いと考えておられる学校にとって比較的取り組みやすいものが多いと考えられます。
  そういった課題感をお持ちの学校におかれましては、本資料に掲載した取組から着手していただくことをご検討いただき、教育委員会におかれましては、校務DXに課題を抱えている学校に対して、校務DXの最初の一歩を踏み出せるよう、こうした取組から取り組むよう促すことなどを通じてご支援いただきますようお願いいたします。

- また、「学校編」においては、校務DXによる業務負担軽減だけでなく、各学校が抱える授業改善や生徒指導上の課題に対して、校務DXがどのように寄与していったのかをご紹介しておりますので、各学校が抱える課題の解決策の検討の際に、ご活用いただけますと幸いです。

本参考資料に掲載した各校の取組一覧

教職員と保護者間の連絡のデジタル化

出欠連絡等のデジタル化	青森県三戸町立 三戸中学校 秋田県三種町立 八竜中学校 福島県玉川村立 玉川第一小学校
保護者へのお便り・配布物のデジタル化	福島県玉川村立 玉川第一小学校
保護者への調査・アンケートへのデジタル化	宮城県女川町立 女川小学校

教職員と児童生徒間の連絡等のデジタル化

児童生徒への調査・アンケート等のデジタル化	秋田県三種町立 八竜中学校

学校内の連絡のデジタル化

職員会議等の資料のペーパーレス化	青森県三戸町立 三戸中学校 岩手県花巻市立 東和小学校 宮城県女川町立 女川小学校
クラウドを活用した会議での検討事項の事前共有・意見集約	福岡県久留米市立 安武小学校
教職員間の情報共有や連絡のデジタル化	青森県三戸町立 三戸中学校 宮城県女川町立 女川小学校 秋田県三種町立 八竜中学校
クラウドを活用した教職員が作成した教材等の共有、整理	岩手県花巻市立 東和小学校

その他

校務における生成AIの活用	福岡県久留米市立 安武小学校

取組事例編

教職員と保護者間の連絡のデジタル化

児童生徒の出欠連絡等のデジタル化

青森県三戸町立三戸中学校、秋田県三種町立八竜中学校、福島県玉川村立玉川第一小学校

取組の内容

児童生徒の欠席・遅刻等の連絡について、**保護者連絡アプリを活用**したデジタル化を通じ、全職員で即時共有。

取組前後の業務実施方法の変化

取組前

各学校の状況として

- ■ 朝の欠席連絡は電話で対応しており、受電→紙へメモ→担任へ共有→板書して全教職員へ共有→校務支援システムへ入力と、複数の作業が必要となることから、**作業負担が大きく、共有遅延リスク**あった。また、出欠簿を出力する校務支援システムへの転記など**入力が二度手間で非効率**だった。
- ■ 情報が担任に偏在し、養護教諭・管理職の関与が遅れるなど**児童生徒の見取りが個人に依存**していた。

取組後

取組を通じた学校の変化として、

- ■ 保護者連絡アプリで**欠席情報を教職員全員で即時共有**のうえ、共有された情報を基に保護者への電話連絡の要否などを判断し、養護教諭や管理職も含めて**組織的に初動で対応**できるようになった。
- ■ 履歴が蓄積された情報を基に、児童生徒の不調傾向の把握が容易になり、**心理的要因の兆しも複数の目で早期に把握**できるようになった。
- ■ 特に、八竜中学校においては、保護者連絡アプリが校務支援システムと連携し、担任の**出欠情報の入力作業が自動化**した。手作業の時間が大幅に減り、**授業準備や生徒対応に時間を割ける**ようになった。

取組前後の業務実施に費やす時間の変化

- 電話問合せが1時間あたり**50本→10本未満**、教頭や教職員の対応時間の合計が60分から**10～15分**になった。（三戸中学校）
- 教頭一人が朝からかかりきりで対応す**る状況が解消**した。また、組織的な子供の見取りが迅速にできるようになり、連絡された内容から保護者への**電話連絡の要否の判断も効率化**した。（玉川第一小学校、八竜中学校）

取組が進んだきっかけ

- 教育委員会が学校に対し、連絡アプリの使い勝手などを丁寧に説明するなど主導的な立場で**共通の連絡アプリの推進を図った**。また、学校側は当該説明を踏まえて教職員間で当該アプリの**メリットの理解促進を進めた**。（玉川第一小学校）
- **秋田県が国の事業（次世代の校務デジタル化推進実証事業）に参画する中、次世代校務支援システムと併せて保護者連絡アプリも共同調達を行った**。（八竜中学校）
- 既に保護者連絡アプリを使った経験のある管理職が、利用開始に向けた設定作業をするなどして**教職員の作業負担を軽減**するとともに、運用中も**丁寧に伴走することで教職員の不安を解消しながら定着**した。（玉川第一小学校）
- アプリ導入までは抵抗感を感じる教職員や保護者がいたが、実際に導入してみると、いつでも連絡が取れるなど教職員・保護者双方にとって負担感が減少する実感を得られたほか、ICTの活用に苦手意識を持つ教職員や保護者にとっても保護者連絡アプリが使いやすいものであったことから、**教職員・保護者双方が利便性を実感**することができ、運用が定着した。（玉川第一小学校）

教職員と保護者間の連絡のデジタル化

保護者へのお便り・配布物のデジタル化

福島県玉川村立玉川第一小学校

取組の内容

保護者連絡アプリを活用し、保護者へのお便り・配布物をデジタル化。

取組前後の業務実施方法の変化

取組前

- 印刷・仕分配布といった作業が必要なため、**担任・事務職員の負担が大きかった**。
- お便りの紛失が頻発し、**問い合わせが保護者から多く寄せられていた**。
- 家庭内の情報共有が紙のお便りに依存していたため、たとえば別居している祖父母などには特に情報が行き渡りにくく、学校に問い合わせが寄せられることもあった。

取組後

- アプリの添付メール機能を使い、**紙で配付すべきもの（※）以外は全て（従来のお便りの半数以上）デジタルで配信**した。その際、配信先は両親に限らず、必要に応じて祖父母等の他の家族も登録できるようにしたことで、家族全員に情報が届くようになった。
  （※）家庭で壁に貼って複数人で確認するという場面が想定される下校時刻、バス時刻表、給食の献立表や宿題関係は紙で配布した。
- 紛失リスクがなくなり、情報が確実に届くようになったことで保護者からの**問い合わせ対応が減少**した。それにより、教職員が**教材研究などに割ける時間が増加**した。

取組前後の業務実施に費やす時間の変化

- 印刷時間・電話問い合わせ対応時間が**大幅に削減した**。
- お便りが確実に保護者へ届くようになり、「お便りが届いていない」といった**保護者からの問い合わせはデジタル化する前に比べ1/2程度に減少**した。

取組が進んだきっかけ

- 令和6年度より、**教職員自身の出退勤や児童の出欠管理など日常的によく取り扱う事務から優先的にデジタル化**を図ってきた。こうした進め方により、これまでICTの活用に対する苦手意識を持っていた一部の教職員も業務負担の軽減を実感することができ、**校務DXに前向きに取り組む雰囲気が醸成**されてきていた。こうした中、令和7年度に**首長部局が域内に共通の保護者連絡アプリを展開**し、本アプリの活用を促す取組を行ったことで、結果として校務DXに取り組む気運が一層高まった。

教職員と保護者間の連絡のデジタル化

保護者への調査・アンケートへのデジタル化

宮城県女川町立女川小学校

取組の内容

Webアンケートフォームを活用し、保護者アンケート等の配布・回収・集計作業をデジタル化。

取組前後の業務実施方法の変化

取組前

- 授業参観や学校説明会、懇談会等の申込は連絡帳や電話による口頭で受け付けており、取り纏める**担任に業務負荷が集中**していた。
- 保護者アンケート等については、紙によるアンケートの配布→回答が記入された紙の回収→手作業で回答の集計をしており、教職員の**作業負担が大きい**ほか、**進捗管理も煩雑**であった。
- 紙による提出物については誤記・未提出が多く、確認のために担任が**電話で保護者に確認する作業が常態化**するなど、**追加作業が負担**になっていた。

取組後

- 校務分掌にあわせて**担任以外の関係する教職員も共同でWebアンケートフォームを作成・管理**できる**業務フロー**に改善した。
- **自動集計**が可能となり、**回収・手集計の作業がほぼ不要**となった。
- 全教職員が**アンケート結果を表データなどで閲覧**でき、**印刷も不要**になった。

取組前後の業務実施に費やす時間の変化

- 従来は、担任が保護者アンケートなどのお便りを印刷・配布し、回答の提出状況に応じて児童生徒を通じてリマインドを行い、回収後に手作業で集計していたが、デジタル化により、**これらの業務に係る負担が大幅に削減**された。
- **集約データを印刷せず共有可能**となり、**各職員それぞれが都合の良いタイミングで確認できる**など情報共有のための時間が不要となった。

取組が進んだきっかけ

- 前任校で同様の**取組経験があった教職員の知見を共有**したことで、実例を交えるなど**効果を手触り感を持って説明**することができたため、校内の合意形成がスムーズに進んだ。
- 保護者側も、紙のアンケートでは子供を通じて提出する必要があったが、オンラインなら保護者が直接回答でき、**手間の軽減や回答を確実に提出できることがメリット**として感じられたことや、**Webアンケートフォームによるオンラインでの回答への抵抗も少なかった**ことが、デジタル化の後押しになった。

教職員と児童生徒間の連絡等のデジタル化

児童生徒への調査・アンケート等のデジタル化

秋田県三種町立八竜中学校

取組の内容

Webアンケートフォームを活用し、生徒の生活アンケートや授業の振り返り等をデジタル化。

取組前後の業務実施方法の変化

取組前

- 毎月生徒向けに行っている生活アンケート等について、印刷・配布・内容確認及び集計まで全て担任が手作業で対応していたため、作業に時間を要し、**アンケート実施から生徒の状況把握まで大幅なタイムラグ**があった。
- アンケート結果を高校卒業まで保存する必要があり、膨大な**紙資料の管理負担が大きかった**。

取組後

- **各種調査をWebアンケートフォームで設計**した結果、**印刷・配布・回収の作業が不要となり、集計も自動化**した。
- 県教育委員会から依頼のあったスマートフォン利用調査や学習状況調査などもデジタル化することで負担軽減を図った。
- 情報支援員が週1～2回来校してICTに不慣れな教職員へ使い方を教えることを通じ、**当該職員のICTの活用に対する苦手意識が減り、校内のICT活用が進むきっかけ**となっている。

取組前後の業務実施に費やす時間の変化

- 生徒向けアンケートの印刷・配布・回答回収及び集計といった一連の業務に係る**手作業が無くなり、作業時間が大幅に削減**された。
- 紙の書類を年度ごとにファイリングしたり保管棚で管理したりする量が少なくなった。
- また、保存期限が過ぎたら処分するなど**長期間の保管作業にかかる負担も軽減**した。

取組が進んだきっかけ

- **町教育委員会がICTの活用を学校任せにせず、**どのようなツールがどのような場面で活用できるのかなどの**情報発信や学校への利活用支援を手厚く実施**したこと、また**校長・教頭が新しい環境の活用に対して前向き**であり、学校全体として**前向きにICTを活用する機運が醸成**されたことが大きかった。
- 町が採用する情報支援員が週1～2回学校へ訪れる機会を捉え、情報支援員に具体的な取組方法や工夫の方法を現場で都度確認することができた。

（実際の生活アンケート調査画面）

学校内の連絡のデジタル化

職員会議等の資料のペーパーレス化

青森県三戸町立三戸中学校、岩手県花巻市立東和小学校、宮城県女川町立女川小学校

取組の内容

職員会議や打合せの各種資料を**クラウドストレージに集約**し資料を共有。

取組前後の業務実施方法の変化

取組前

- およそ月1回の職員会議や週１回の打合せの都度、会議資料や週予定を30部以上印刷し配布しており、**印刷作業に要する教職員の負担が大きかった**。（女川小学校）
- 必要資料が校内でしか閲覧できないため、**テレワークの実施が難しかった**。（女川小学校）
- 会議が紙資料で行われていたため、**印刷や内容確認に手間と時間がかかっていた**。また、会議後には紙資料から**必要な情報を探すのにも時間がかかっていた**。（東和小学校）
- 紙を印刷・配布して会議を行っていたため**準備作業に多くの時間と労力がかかっていた**。（三戸中学校）

取組後

- **資料はクラウドストレージ等で共有**し、印刷配布は必要者のみとする運用に変更したことで、**印刷作業・修正に伴う手戻りが大幅に減少**した。（女川小学校）
- 職員会議・経営計画等会議資料をデジタル化したことで、**資料検索や保管が容易**になり**業務効率が向上**した。（東和小学校）
- 情報共有ツールで分掌別の作業スペースを設けたことで、**会議資料の共有と確認が容易**になり**紛失リスクも減少**した。（三戸中学校）

取組前後の業務実施に費やす時間の変化

- １時間かかっていた**会議資料の印刷・配付準備が不要**になった。（東和小学校、三戸中学校）
- 印刷コストは**年間で数百万円かかっていたが、今は半減**した。（三戸中学校）

取組が進んだきっかけ

- 授業や生徒指導などはベテランの教員が若手に教える、若手が得意なICTの活用方法は若手がベテランに教えるという助け合いの文化がもともとあった。その文化を活かす形で、「**やり方を変えるのだから一時的に負担は増える、ただし慣れれば絶対に楽になるからみんなでがんばろう**」とICTの活用に苦手意識を持つ教員に対して声掛けした。（女川小学校）
- いきなりすべてをデジタルに切り替えるのではなく、**難しければ紙や口頭での情報共有も可としながら徐々に取組を進めた**。すでに職員会議はペーパーレスだったので、その他の打合せ等を徐々にペーパーレスに切り替えた。（女川小学校）
- 教頭が、規模が小さい学校から、教職員60名程度を抱える本校へ異動してきた際、**会議資料の印刷だけでも業務負担が大きいことに問題意識**を感じ、クラウドストレージに情報を集約し、**紙・口頭での情報共有を原則廃止することでクラウドストレージを使う必要性を生み出す**等、ペーパーレス化に向けた働きかけを積極的に行った。（三戸中学校）

学校内の連絡のデジタル化

クラウドを活用した会議での検討事項の事前共有・意見集約

福岡県久留米市立安武小学校

取組の内容

クラウドで会議資料を共有し、**意見集約には会議の目的に応じて複数のツールを使い分ける**ことで、会議を「必要な議論だけを行う」構成へと変更。

取組前後の業務実施方法の変化

取組前

- 紙資料の準備・印刷・回覧が必要で、**教務担当者等に大きな負担が生じていた**。
- 資料説明・調整に時間を取られて会議が1時間以上かかることも多く、**業務時間後まで延長するケースも散見**された。
- 資料を紙で保存するため、**過去の関連情報を探すことが難しい**ほか、修正が生じた場合の**バージョン管理や修正時の紙の差し替えにも多くの手間が発生**していた。

取組後

- 事前共有と意見集約がクラウドで完結するようになったため、会議では議論に専念でき**短時間で核心部分のみを話し合う場**となった。
- 資料の**共同編集が可能**となり、修正時の差し替えやそれに伴う再印刷の必要がなくなったため、**会議の事前準備作業が大幅に削減された**。また、**資料のバージョン管理も容易**になった。

取組前後の業務実施に費やす時間の変化

- 開催時間が、会議によっては**1時間 → 15分へ短縮**した。
- **真に必要な場合のみ会議を開催するよう方針**を立てた結果、会議の開催回数も、運営委員会（※）は令和7年度中に3回（前年度から7回削減）、職員会議は令和7年度に9回（前年度から4回削減）となるなど大幅に削減することができた。
  ※：管理職と一部教員が参加し、校務分掌や実務に関する検討等を行う会議
  ⇒ 本取り組みも奏功し、2024年度は**時間外在校等時間が80時間超の教員が0**になったほか、**時間外在校等時間が45時間以上の教員も大幅に減少**した。なお、これにより生じた時間的余裕は、教員それぞれが教材研究など自己研鑽に充てることができている。
- 働き方が改善され、**毎年教員向けに実施しているストレスチェックアンケートの活気とやりがいに関する得点も向上**した。
- 印刷用紙の購入代金が昨年度に比べ、**3割～4割削減**できた。

取組が進んだきっかけ

- 長時間の会議で負担が大きいとの声が挙がるなど、教職員から**業務効率化が強く求められた**。
- 学校や自治体でクラウド活用が広がりつつあり、**時短・業務改善効果が明確**となったことで、校内の協力が得られ導入が加速した。

学校内の連絡のデジタル化

教職員間の情報共有や連絡のデジタル化

青森県三戸町立三戸中学校、宮城県女川町立女川小学校、秋田県三種町立八竜中学校

取組の内容　教職員間の連絡・情報共有を**チャットツール等でデジタル化**。

取組前後の業務実施方法の変化

取組前

- 情報共有が紙のメモや口頭が中心であったため、紙に書いた連絡内容を職員室にいる教職員が教室に届けたり、担任が職員室に戻ったりしないと確認できず、**情報が伝わるまでに時間と手間**がかかっていた。（女川小学校）
- 情報共有は紙のメモや口頭が中心で、**連絡を見落とす職員が多かったり情報が正確に伝わていなかったりする**など、情報の正確な伝達の実現が課題だった。（八竜中学校）

取組後

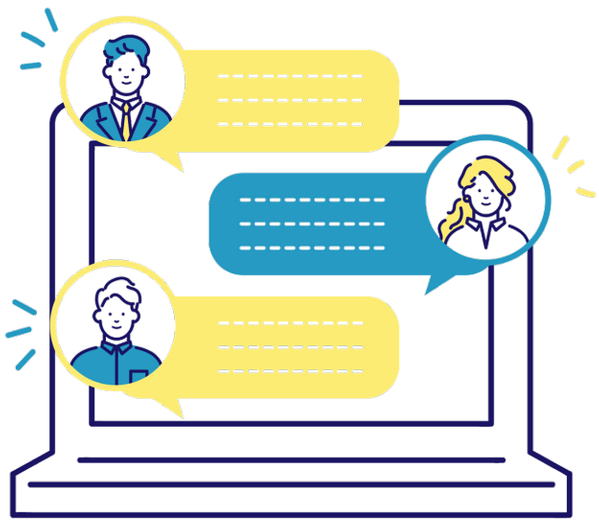
- チャットツールで連絡を即時共有でき、**緊急時の招集も個別連絡なしで迅速に行える**ようになった。（女川小学校）
- クラウドストレージ上で行事予定・連絡事項を一元化し共同編集できるようになったことで**、行事予定などを他の教職員へ「更新したかどうかを確認する作業」などの手間が減少**した。（八竜中学校）
- 情報共有ツールやチャットツールで日程・来客・部活情報を共有し、**複数人で状況把握しながら対応できる体制が整った**。（三戸中学校）

取組前後の業務実施に費やす時間の変化

- デジタル連絡により、職員間の確認漏れが減り、**やり取りの手戻りが削減**した。
- 紙配布の削減とチャット共有により、**資料探しや状況確認の時間が短縮**した。（三戸中学校）

取組が進んだきっかけ

- 前任校でデジタル連絡が一般化しており、紙のメモ中心の運用に不便を感じた教頭が、**前任校で得たノウハウを共有し、デジタル化を率先して広めるよう尽力**した。（女川小学校）
- 以前から、近隣の学校長との打ち合わせをTeamsを活用しており、そこで培われた**ノウハウを学校内で共有**しつつ、実際に職員会議等に活用することを通じ、**ICTの活用に苦手意識を持つ教員も使用方法を学びと実践を繰り返して徐々に慣れる**ことができた。（八竜中学校）



学校内の連絡のデジタル化

教職員が作成した教材等のクラウドを活用した共有、整理

岩手県花巻市立東和小学校

取組の内容

教材をクラウド上の学習用ワークスペース**で複数の教員と共有**した。

取組前後の業務実施方法の変化

取組前

- 教材は各教員が独自に作成しており、共有することも少なかったことから、同じ内容の**教材を複数教員が重複して作成**してしまうことが多かった。
- 校務に用いる端末は持出不可かつ有線によるネットワーク接続のため、職員室以外で資料を参照できない環境であったことから、基本的に紙で資料を準備する必要があった。

取組後

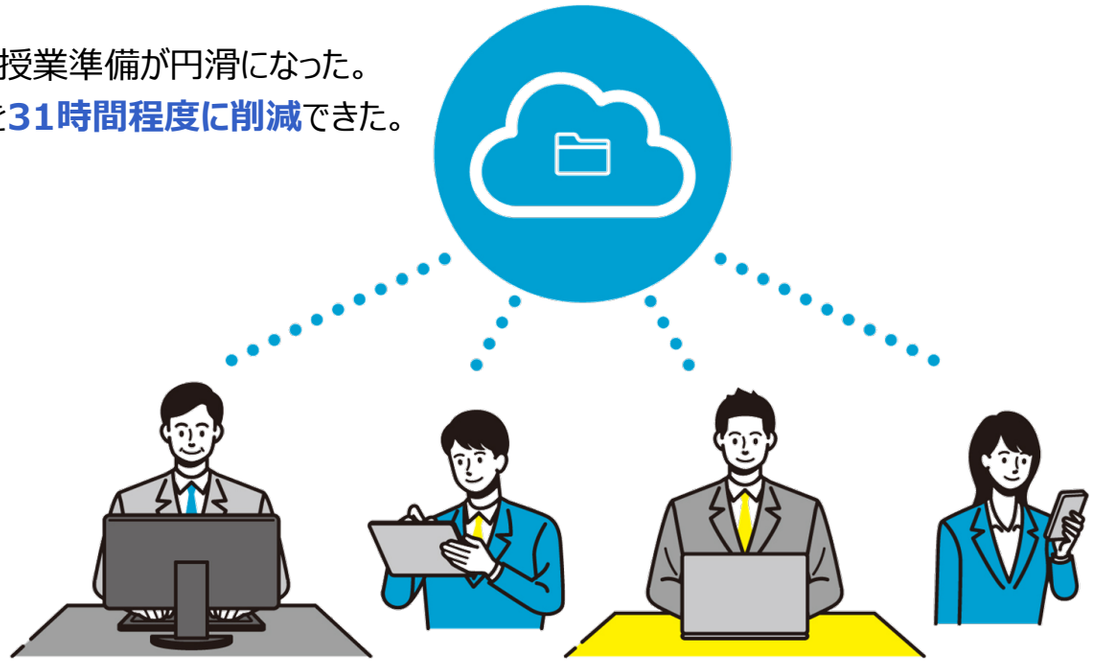
- クラウド上の学習用ワークスペースの資料フォルダに**教材を校内共有**でき、**教材作成・準備の利便性が向上し授業改善**につながった。
- ネットワークの無線化を通じて他の教職員が作成した資料を参照できる環境が整備され、類似した内容の資料を作成する際の参考にできるようになったため、**検討作業に係る負担感が減少**した。

取組前後の業務実施に費やす時間の変化

- 教材共有・準備の効率化により、日々の**教材作成時間が削減**され、授業準備が円滑になった。
- **他の校務DXの取組**もあり、教員１人当たりの**時間外在校等時間**を**31時間程度に削減**できた。

取組が進んだきっかけ

- 「**授業準備に要する時間が長い**」ことを問題視する声が教職員から挙がってきていた。こうした中、他校の取組事例を参考に、「**過去の教材や同僚の作成した教材を参照できる環境を作ることで負担軽減を図ることが可能ではないか**」という提案が教職員からも挙げられたことを受け、本取組に取り組んだ。**ICTに苦手意識が無い教員が中心となって取組み、教頭も支援する**ことで本取組が進んだ。



校務における生成AI活用

福岡県久留米市立安武小学校

取組の内容

生成AIを校務で活用し、教材研究や文書作成の効率化と教育の質向上を同時に進める取組を展開した。

取組前後の業務実施方法の変化

取組前

- **情報収集・教材研究・文書作成が手作業中心**であったため教員の負担が大きく、**授業や教材の改善に向けた発想や工夫も個人の力量に依存**していた。
- 業務効率化を図りたい一方で、生成AIを活用する意義や目的が十分に共有されていなかったため、一定のルールを周知していたにもかかわらず、**一部の教職員のみが利用する状況**であった。
- 生成AIに対し「考える力が衰えるのでは」「生成AIの回答は正しいのか」などの不安があり、**積極的な活用につながりにくい状況**があった。

取組後

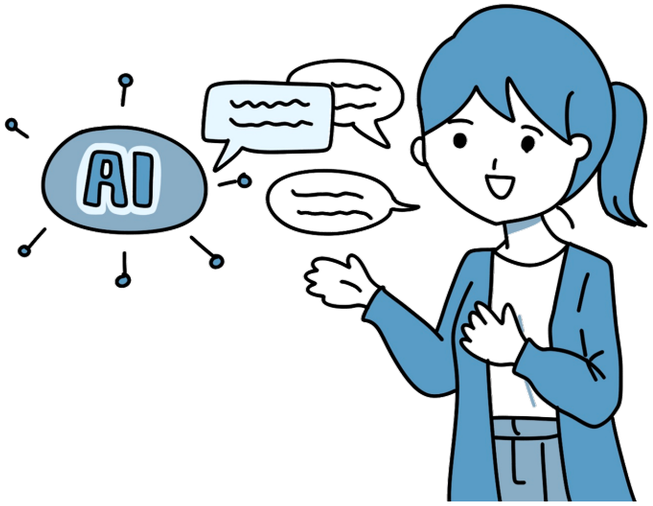
- 各種生成AIツールを用途に応じて使い分け、**要約・情報収集・教材作成が短時間で可能**になった。
  また、教材や文書を多角的に検討できるようになり質が向上した。

取組前後の業務実施に費やす時間の変化

- **議事録の作成が30分 → 2～3分に短縮される**など、大幅な効率化を実現した。
- 教材研究やアンケート分析の時間が削減され、**日常的な業務時間の圧縮**に寄与した。

取組が進んだきっかけ

- 校長は、前任校が生成AIの活用推進校であったことから、**生成AIが教育の質向上・教員の能力向上に寄与する**との認識を持っており、本校でも取り組みを進めるべく積極的に働きかけた（具体的な働きかけの例は以下のとおり）。
  - 職員会議の席などを通じて、生成AIを「優秀な秘書」として活用する発想を共有し、業務効率化だけでなく**学びの質向上を目指すという目的が明確**だったことが教職員の理解を得ることに繋がった。
  - **生成AIの具体的な利用シーンや効果、留意点**などを研修などで展開した。
  - **学年をベテランと若手で受け持つ体制**とすることで、**ベテラン・若手双方が自身の強みを生かし、助け合う文化を醸成**した。
- 校長から教員に対し、生成AIは使い方次第で**業務の省力化のみならず質の向上に繋がることなどのメリットを、活用シーンのイメージとともに根気よく伝える**とともに、**留意点も職員と随時共有**することで、不安が軽減された。



学校編

青森県三戸町立三戸中学校

出欠連絡に保護者連絡アプリ、職員会議資料など教員間の情報共有に情報共有ツール、保護者を含めた情報共有にチャットツールを活用することで、迅速で効率的な連絡と紙削減を実現

学校運営上の課題や問題意識

- 養護教諭・管理職も含め組織的対応を進め、**より丁寧な子供の見取りを実現したかった**。
- ペーパーレス化による**教員の業務負担の軽減**と**印刷コストの削減**を進めたい。
- 緊急時対応を確実かつ迅速に行うため**情報共有が必要な教職員への一斉連絡できる体制を確立したい**。

取り組もうとしたきっかけ

- **教育委員会や学校が学校内外のコミュニケーションを円滑化・効率化するためのツールを導入したり、それに係る研修を行ったりする**等、丁寧な子供の見取り、業務負担の軽減と印刷コストの削減、迅速な教職員への連絡の3点を実現できる環境の整備が推進されていた。
- 上記研修等での学びを通じ、必要な相手との連絡には校務分掌ごとにスペースを持てる情報共有ツールが有益であることを理解できた。

実際の取組

【出欠連絡等のデジタル化】

- **保護者連絡アプリで集約**した出欠内容を校務支援システムに入力し複数人で共有できるようにした。あわせて、**養護教諭が校務支援システム上で内容を確認・修正**するようにした。
- **町域内の小学校と中学校との間で情報を共有**し、**兄弟がいる家庭に対しても切れ目ない支援（※）**ができる体制を構築した。
  （※）子供に何らかの異変や違和感が見られた際に、それがその子個人のものなのか、兄弟に共通して見られる傾向なのかといった点からの見取り。

【職員会議等の資料のペーパーレス化】

- 職員会議・分掌会議・研究会など**、紙での保管が規程上不要な資料はすべて情報共有ツールで共有**し、**紙の配布を廃止**した。
- 個人情報を含む資料（子供のアレルギー、家庭環境などの情報）は必要な教職員のみに限定して共有するなど、**情報管理に配慮しながらデジタル運用を推進**した。

【教職員間の情報共有や連絡のデジタル化】

- 日程・来客・出張・行事・大会結果など**日常連絡を情報共有ツールへ集約**し、**全教員がリアルタイムで確認**できるようにした。
- 教職員だけではなく保護者にも情報共有が必要な部活動に関する情報は**チャットツールで一斉共有**できるようにした。

成果

- 欠席情報を複数人で見られるため、**組織的な子供の見取りや支援ができるようになった**。
- 町域内の小学校と中学校との間で情報管理ができるので、**兄弟がいる家庭に対するサポートもできるようになった**。
- 会議資料は情報共有ツールに投稿するだけで共有でき、印刷作業は不要になり、**教務主任の時間外在校等時間が大幅に減少**した。
- **資料が整理され探しやすく**なり、当日の資料のみならず、過去の会議資料などにすぐアクセスでき、**会議の準備や進行がスムーズ**になった。

取組が進んだきっかけ

- 担任が校務支援システムへ入力→養護教諭が確認・修正という明確な役割分担を設計し、**迷いなく運用できる手順にした**ことで定着が進んだ。
- 校務支援システム→指導要録の自動連携により**「転記が不要になる」メリットを早期に体感**でき、また町域内の**小学校と中学校との間での情報共有も成果を実感**しできたことで、現場の支持を得られた。
- **操作が簡単な情報共有ツール**を使ったことでICTの活用に苦手意識を持つ教員も負担なく利用でき、紙運用からスムーズに移行できた。
- 印刷に係る手間の削減・紛失防止・資料の探しやすさ改善など、**明確かつ即効性のあるメリットが**あるため、**教員の納得感が高まり**定着が進んだ。

岩手県花巻市立東和小学校

職員会議・経営計画・分掌会議の資料を共有フォルダに格納し、紙量と印刷等の作業時間を大幅に削減
教材をクラウド上の学習用ワークスペースで共有し、教材作成・授業準備の効率化と質向上を促進

学校運営上の課題や問題意識

- ペーパーレス化による**教員の業務負担の軽減**を進めたい。
- 授業の質を上げるために、授業教材を「校内で知識を持ち寄る形」へ転換し、**教材作成の効率化と授業改善**を進めたい。
- ベテラン教員の授業教材やその教材を使った指導方法などを共有することで、**若手教員の指導力向上**にもつなげたい。

取り組もうとしたきっかけ

- 副校長が前任校でペーパーレス化による業務の効率化を経験しており、本校の**紙中心の文化に強い改善意欲**を持っていた。
- クラウド上の学習用ワークスペースは、本校では既に授業における児童への資料配布等に活用されるなど利用方法が既に浸透している中、**当該ワークスペースの資料フォルダを教材共有に活用すれば全体の効率が上がることを校内研修で説明**したことで、教職員からも是非使いたいとの声が上がるようになった。

実際の取組

【職員会議等の資料のペーパーレス化】

- 職員会議、経営計画、分掌会議などの**会議資料を共有フォルダに集約**し、全教員が閲覧できるようにした。
- 校内の教職員のみが関係する資料はペーパレス化し、研究資料やPTA資料など校外向けの資料は**紙のまま作成することとした**。

【クラウドを活用した教職員が作成した教材等の共有、整理】

- 作成した**教材をクラウド上の学習用ワークスペースの資料フォルダに蓄積**し、**全教員が検索・再利用できる環境を整えた**。

成果

- **資料は共有フォルダに格納することで即共有**され、印刷は必要な職員だけが実施することとした。この結果、修正時の差し替えもデータ更新のみと容易になり、**準備時間が大幅に削減**された。
- 資料がカテゴリで分類整理できるため、**必要資料に短時間でアクセス**しやすくなり、**会議運営がスムーズ**になった。
- クラウド上の学習用ワークスペースの資料フォルダを介して**教材を教員間で共有**でき、**教材作成・準備の効率が向上**したほか、**授業の質向上**に繋げることもできた。
- デジタル教材の活用により**授業準備の重複作業が減少**し、**教員間で資料を「みんなで活用」する運用が実現**できた。

取組が進んだきっかけ

- 職員会議など関係者が**学校内のみのものからデジタル化することで、教職員が慣れやすいペースで定着を図る**計画ととしたことで、無理なく取組が進められている。
- クラウド上の学習用ワークスペースを導入してから年数が経ち、操作への抵抗感が低かったため、**教材共有への移行がスムーズ**に進んだ。

宮城県女川町立女川小学校

保護者向けのアンケートをWebアンケートフォームで、教職員間の情報共有や連絡をクラウドストレージ・チャットツールでデジタル化しつつ、業務フローを継続的に見直すことで業務負担を削減

学校運営上の課題や問題意識

- **保護者アンケートに係る回答の回収・集計に時間を要する**ことや、職員会議や打合せなどに係る資料の**印刷・配布に多くの手間と時間を要する**ことなど紙媒体であることに基づく作業負担や、**事務負担が担任に集中する**ことや**学校全体で状況を共有しづらい**こと、紙や口頭による情報共有は、直に接する必要があるため時間や手間がかかるといったアナログ作業による弊害を解決したいと考えた。

取り組もうとしたきっかけ

- 教職員の業務負担軽減や利便性向上を目的に、場所にとらわれず業務ができる環境を作りたいという思いから、校外からも資料などを確認できるクラウドストレージの活用を進めた。
- 緊急の集合時に個別に声掛けする負担が大きく、**即時に情報を届けられる手段**が求められた。

実際の取組

【保護者への調査・アンケートへのデジタル化】

- 授業参観、説明会、懇談会などの**保護者からの申込みをWebアンケートフォームへ切り替え、担任以外がフォームを管理する業務フローにし**担任の負担を軽減した。
- **水泳学習カード**（保護者が体温や体調などを記入し、入水の可否を示すもの）を電子化したことで、**保護者・担任の押印を廃止**した。

【教職員間の情報共有や連絡のデジタル化】

- チャットツールを導入し、**行事変更・日々の連絡・情報共有をデジタル化**し、**打合せ資料をクラウドストレージのフォルダへ格納**し、チャットツールで資料を格納したことを共有し、紙が必要だと思う人のみ印刷する運用へ変更した。

【職員会議等の資料のペーパーレス化、教職員間の情報共有や連絡のデジタル化】

- チャットツールと口頭（子供の情報、生徒指導や家庭の情報、テキストで残さないほうがよい情報、分量が多い情報など）を使い分け、**雰囲気を含めた共有が必要な内容は対面で伝える運用も残した**。

成果

- 保護者からの申込がWebアンケートフォームで自動集約され、**担任を介さず情報が共有されるようになり、担任の負担が軽減**したほか進捗把握が容易になった。また、全教職員がアンケート結果を表データなどで閲覧でき、印刷も不要になった。
- 資料はクラウドストレージ等のフォルダへ格納され、印刷・配布の手間が減った。また、修正時の差し替えも不要になり、会議運営がスムーズになった。
- チャットツールに投稿すれば**全職員へ即時共有されるなど、場所に関係なく連絡を受け取れる**ようになった。

取組が進んだきっかけ

- 前任校で同様の**取組経験があった教職員が旗振り役**となったことで、効果を見通しながら導入を進めることができた。また、**他の教員も旗振り役の意図を汲み取り、フォロワーシップを発揮して取り組んだため**、校内の合意形成がスムーズに進んだ。
- 保護者側も、紙のアンケートでは子供を通じて提出する必要があったが、オンラインなら保護者が直接回答でき、**手間の軽減や提出の確実性がメリットとして感じられた**こと、**オンラインでの回答への抵抗も少なかった**ことが、デジタル化の後押しになった。
- 前任校は校務に関わるすべての資料をクラウドストレージに格納していたが、本校ではそのような文化はなかった。そのため、拙速にペーパーレス化にして情報共有をクラウドベースに移行すると教職員の負担感が大きくなると考えられたことから、**少しずつ定着できていることを確認しながら進めた**。
- 教務主任が職員室で**「チャットに重要連絡を投稿したので確認をお願いします。」**と声掛けするなど、**確認習慣を身につけさせたことで定着が進んだ**。

秋田県三種町立八竜中学校

出欠連絡を保護者連絡アプリ、アンケートをWebアンケートフォーム、会議資料等の情報共有をクラウドストレージによりデジタル化し、情報共有の効率化と紙媒体の管理等の作業コストを削減

学校運営上の課題や問題意識

- **子供一人一人を組織的・継続的に見取る**体制を充実化したい。
- ペーパーレス化による**教員の業務負担の軽減**と**印刷コストの削減**を進めたい。
- 緊急時を想定した、教職員に一斉に確実に連絡できるようにしたい。

取り組もうとしたきっかけ

- 県教育委員会による**県内共同調達により保護者連絡アプリを導入**できたほか、町教育委員会のポータルサイトや研修でチャットツールやクラウドストレージの具体的な活用方法などが示されたことで、学校としてデジタル移行に前向きに取り組むことができる環境となった。
- 保存期間が高校卒業まで必要な**生活アンケートの回答などを紙で管理する場合の保管コストが高い**ことに問題意識を感じていた。

実際の取組

【出欠連絡等のデジタル化】

- 保護者連絡アプリでの出欠連絡をもとに、**健康面や登校状況などに係る対応の必要性を複数人で判断**し、必要な家庭には適時電話するなど丁寧な対応ができる体制を構築した。

【児童生徒への調査・アンケート等のデジタル化】

- Webアンケートフォームで毎月の生活アンケートを作成し、**自動集計により職員の作業量を大幅軽減**した。

【教職員間の情報共有や連絡のデジタル化】

- クラウドストレージ上で連絡・行事予定のファイルを共有し、その他の資料もクラウド管理へ移行して**紙媒体の使用を大幅に削減**した。
- **共同編集を活用し、学習場面や行事予定の調整を効率化**した。デジタル化のメリットを教員が実感しやすい場面を増やした。

成果

- 保護者連絡アプリで出欠連絡が集約され、連絡内容に応じて夕方に保護者に相談対応を実施し、**生徒の状態把握が丁寧かつ的確になった**。
- 入力データが自動で一覧化され、**支援が必要な生徒の情報をすぐに確認できるようになり、支援の初動が早くなった**。
- **アンケート処理をクラウド上で一元管理**でき、**紙管理の負担がほぼ解消**した。
- クラウドストレージでの一斉共有により連絡の見逃しが減少し、行事変更なども即時反映され、**全教職員が同じ情報を同時に把握できる**ようになった。
- 資料の共同編集で作業が効率化し、修正時の紙の差し替えが不要になった。会議資料もデジタル化が進み、紙運用から脱却した。

取組が進んだきっかけ

- **県統一の校務支援システムの導入や町のデジタル環境整備が後押し**となり、「導入されたので使ってみたい」という意識変化が生まれた。
- 会議時間の短縮、準備時間の削減等の働き方改革推進の一つとして、職員会議については9月からペーパーレスの方向を打ち出しす等、**校長の強いリーダーシップにより、全教職員がICTを活用した会議運営の習慣化**を進めやすくなった。
- **若手教員によるICT機器操作の支援や学校支援員の週次サポート**があったことで、 ICTの活用に苦手意識を持つ教員でも挑戦しやすい環境ができており、資料の共同編集など「手間を省ける便利さを直接体感できる場面」が多く得られたことが、スムーズな定着につながった。

福島県玉川村立玉川第一小学校

保護者連絡アプリを活用し、出欠連絡・配布物をデジタル化したことで、保護者との確実で効率的な情報伝達手段の確保と教職員全体での子供の見取りを実現

学校運営上の課題や問題意識

- 欠席連絡が電話中心で担任に負担感があったほか、**担任以外の関係者と情報共有が難しいことに課題感**があり、**子供一人一人を組織的・継続的に見取る体制に強化**したい。
- ペーパーレス化による**教員の業務負担の軽減**と**印刷コストの削減**を進めたい。

取り組もうとしたきっかけ

- **教育委員会が保護者連絡アプリを学校に導入**したことで、欠席連絡やお便りなどの配布を**デジタル化する環境が整った**。
- **紙で渡す必要がない配布物が多く**、デジタル化すれば**負担軽減の効果が大きい**と考えた。

実際の取組

【出欠連絡等のデジタル化、保護者へのお便り・配布物のデジタル化】

- 「都合の良いタイミングに連絡できる」などの保護者にとっての利点を強調、また「今後は重要連絡はアプリで届く」ことを説明し、登録を促す働きかけを行った。また、運動会などの重要な行事のタイミングでも働きかきかけた。

【保護者へのお便り・配布物のデジタル化】

- 下校時刻表・給食献立など家庭での壁貼りが適したもの、子供と保護者が一緒に見て学んでほしいもの、宿題関係の配布物は紙のまま、その他はメール添付とし半数以上をペーパーレス化した。

成果

- 欠席理由や傾向をアプリで教職員全員が確認でき、養護教諭・管理職も含め、**家庭への連絡要否や支援方針を組織的に判断**できるようになった。
- 保護者からの連絡内容が自動的にデータとして蓄積されるため、**欠席傾向や理由を過去にさかのぼって確かめられ、判断の精度が向上**した。
- 保護者への多くの配布物をメール添付で送れるようになり、**印刷・配布の手間が減少**した。家庭でも必要なときに確認できるようになった。
- 保護者からの配布物紛失による問い合わせが減り、**教職員が教材研究などに割ける時間が増加**した。

取組が進んだきっかけ

- 本格運用に向け、**教頭が設定作業を伴走して支援する**とともに、**教員が操作に習熟するための期間も別途確保**した。これにより、ICTの活用に苦手意識を持つ員の不安を軽減し、円滑な導入に繋げた。
- 学校への電話問い合わせが減少するなどの明確かつ即効性のあるメリットがあるため、教員の納得感が高まり定着が進んだ。

福岡県久留米市立安武小学校

生成AIを校務に導入し、各種クラウドツールで会議・意見集約・事務手続・情報共有を効率化して業務時間を削減

学校運営上の課題や問題意識

- 職員会議を、単なる情報共有などを省き、**議論が必要な内容に絞って開催する**こととし、不要な時間を削減したい。
- 教員が子供と向き合うための時間や授業改善・授業研究の時間など**教員にしかできない業務に充てる時間を確保したい。**
- 長時間に亘る会議が時間外在校等時間の増加に繋がっていたため、**必要な内容に絞って効率的に議論する仕組みが必要**だった

実際の取組

【クラウドを活用した会議での検討事項の事前共有・意見集約】

- オンライン表計算ツール・Webアンケートフォーム・オンラインホワイトボードなど**複数ツールを会議目的に応じて使い分け、検討事項の事前共有・意見集約**に活用した（※）。

  （※）職員会議、職員連絡会（終礼）、地域連携活動会議、部会代表委員会、特別支援校内委員会はオンライン表計算ツールで情報共有し、校内研修では意見集約・議論にオンラインホワイトボードを活用した。また互いに直接意見を共有して話し合った方がよい、いじめ・不登校会議、学年会は対面で実施した。
- クラウド上で事前に資料共有し、**会議は「必要な議論だけを行う」構成に変更**した。

【校務における生成AIの活用】

- **動画の作成などはCanvaAI、文章や資料の推敲、アイデア出し等はGeminiとするなど、複数の生成AIツールを特性を踏まえて使い分け**、**教材・動画・資料の作成を効率化**した。
- **若手教員が先導して活用例を共有**し、**校長が繰り返し、生成AIを活用する目的を説明**して全体の理解を促した。

成果

- 事前共有と意見集約がクラウドで完結し、**会議は短時間で核心部分のみ議論**するようになった。
- 資料はクラウド上で共同編集され、修正時の**差し替えや印刷の必要がなく準備作業時間が大幅に削減**され、資料のバージョン管理も楽になった。
- 生成AIの活用により**会議議事録は2～3分程度で作成可能**となり、**担当の作業時間が大幅削減**され、**他業務に時間を回せる**ようになった。
- **教材研究・資料作成・案出しが生成AIで効率化**され、**教員が授業で子供との触れ合い**などの教員が子供との直接的な関わりを伴う教育活動に**集中できる**環境が整った。

取組が進んだきっかけ

- 校長が「何のためにICTを使うのか」を連絡会、職員会議、校内研修などでの**短時間（3～5分程度）**で資料を元に**継続的に発信し、啓発**した。
- **様々な業務へ試行的に使ってみる（※）、繰り返し使って覚えるとその便利さや良さを実感**するといった流れができたことで活用が広がった。

  （※）以下の取組により、教職員の間で「試行的に使ってみよう」という姿勢が醸成された。
  - 校長やICTの活用が得意な教員による研修などを通じて、定期的に情報共有やノウハウの展開を行った。
  - 失敗しても構わないことを、校長が明確なメッセージとして発信した。
  - 校長自らが、具体的な活用場面活用方法を例示した資料を作成・提供した。
- 一気にデジタル化を進めると、苦手な教員は対応しきれなくなる可能性があるため、**クラウド上で資料の共有・編集からはじめたり特に時間がかかる職員会議の議事録作成から徐々にデジタル化したりするなど、段階を追って慣れることができるよう計画的に取組を進めた**。
- 生成AIを「優秀な秘書」として活用する発想を共有し、**業務効率化だけでなく学びの質向上を目指すという目的**が明確であったことが教職員の理解を得ることに繋がった。